

Title	カール・レーヴィット ウェーバーとマルクス
Sub Title	
Author	青沼, 吉松
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1948
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.41, No.4 (1948. 4) ,p.227(62)- 231(66)
JaLC DOI	10.14991/001.19480401-0062
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19480401-0062">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19480401-0062</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カール・レーヴィット

「ウェーバーとマルクス」

青沼吉松

ウェーバーは神々の争ひといふ時代の宿命に面して、来るべき豫言者を徒手して待ち焦れるといふ態度を改め「我々の仕事に就かう、そして『時代の要求』に従はう」(Ges. Aufs. Z. Wissenschaftslehre, (以下 W. L. と略記) S. 555) とした。彼のかかる態度は「完全に事象 Sache に仕へる人」(W. L. S. 533) のそれであった。彼の態度はかく事象的 Sachlich であつたが、しかも彼は現在の状態に無批判的に固着しようとはしなかつた。資本主義の合理化において「一種の病的自己陶醉をもつて扮飾された化石的機械化」(棍山譯「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」二四五頁)を懸念し、又「空想の高所から生起の流れを見よう」と身構へる(W. L. S. 214) 態度において、ウェーバーは事象を越えて事實 Tatsache を問題とする。

資本論の對象たる商品は社會の富の現象形態 Sache であるが、しかしそれは「資本制生産様式が支配的である社會の富」(Das Kapital, S. 39) のそれとして本質的には事實を

ものである。従つて資本論は商品を對象とするところによつて、人間を問題とする。しかも「市民社會の解剖學は政治經濟學に求めらるべきである」(Zur Krit. d. pol. Ök. S. LV) とする研究方法は「個々のものから」一般的なものへ登る(Ibid. S. VII)といふ方法である。従つて「主體たる人間と客體たる自然とは同一のものである」といふことから既に生ずるところの統一(Ibid. S. XVI)は研究の出発點において先取りせられないうで、特定の歴史的發展段階としての資本主義を特徴づけるところの「一般的なものからの差異が、一般的なものから分離されて、先づ問題とされる」(Ibid. S. XV-XVI) かつて資本論においては商品 Sache に即して事實が追究される。

マルクスとウェーバーにとつての問題は、思惟的抽象的事實ではなくて、具體的な、それ自身歴史の特定段階としての事實であつた。従つて彼らは諸現象 Sache の聯關の統一としての實踐 Tat を疎外はするが、それを捨象しない。それ故にこそウェーバーは二義的に、マルクスは一義的にの相違はあつても、共に資本主義に對して批判的であつた。しかもかかる批判は彼らの研究方法が事象的であつたといふことにおいて、思惟的ではなく實踐になされる。現象に即して實踐を導き出すことによつて事實を把握せんとする彼らの方法は獨自の意味において經驗的方法(註)と稱し得る。

經驗的方法は事實の問題性によつて基礎付けられることにお

いて事實に即する。ウェーバーは神々の争ひといふ時代の宿命に面して、没價值的に事象を研究對象とする。マルクスは價值表現の祕密は資本制商品社會においては價值形態から讀みとり得るし、又さうしなければならぬが故に、商品を研究對象とする。

人間の關係が事象の關係として現象する場合には、實踐は即自的ではなく、疎外的に、即ち事象に即してのみ導かれる。事象がそれ自體として固執されるならば、無意味なもの「事物 Ding」になる。事象は事實においてのみ意味あるものであるから、事象において實踐はありのままの姿ではないが疎外された形において含まれてゐる。従つて事象は實踐への契機を消失してはゐない。それ故に實踐は諸現象の聯關の統一として、究極における原理の問題であり、哲學的問題であるから、それは哲學的のみ把握されねばならぬとするものは、事實に即してではなく、思惟に即して現實を解明せんとする形而上學的方法に立脚する經驗的方法においては問題の焦點が哲學的であるからこそ、それは哲學疎外的に究明さるべきであるとする。かかる點において、レーヴィットの所説は批判される。

(註) かかるものとしての經驗的方法は形而上學的方法との對比によつてその意味が明らかになる。

形而上學的方法は原理—理念 Idee 又は事物 Ding—から諸現象を説明しようとする。しかしかかる原理は事實に即して把握

ウェーバーとマルクス

握されたのではなく、思惟的に先取りせられたものであるから、實踐によつて檢證さるべきである。しかしこの方法においては原理—統一—實踐は既に出發點とされてゐるから、實踐的檢證はなされない。従つて形而上學的認識は事實を把握し得ないにもかかはらず、それをなし得ると主張する時、かかる形而上學は先驗的觀念論によつて認識能力の批判を缺く獨斷論として批判される。

先驗的觀念論はその研究關心を哲學的問題に局限する限り形而上學的方法をとるが、認識の規制原理としての理念の假設性の指摘により、その方法の限界を明らかにし、形而上學的認識の實踐的檢證を可能にした。更に先驗的理念は認識を超越するが、しかも事實を超越することこそ理想である。事實に即する態度は經驗的方法であるから、先驗的觀念論は形而上學的方法をとりながら、經驗的方法への展望をもつてゐる。

經驗的方法は形而上學的方法とは逆に統一をひそめて事象に即することにより事實を究明せんとする。人間が單なる自然とは區別されるものである限り、現象と本質とが直接的に一致することはないから、經驗的方法はあらゆる時代的制約をこへて存在理由を見出す。しかし物象が具體的に何であるかといふ問題は時代的に制約される。この方法は形而上學的方法と對立するが、しかし専門科學の一面性の總計たるその多面性をもつて事實を説明し得るといふ程實證的ではないことにおいて、哲學



的問題を内在してゐる。

レイヴィットはウェーバーとマルクスの研究領域は共に資本主義である (K. Löwith, M. Weber u. K. Marx, Archiv. f. Sozialwiss. u. Sozialpol. 1932, S. 53) 資本主義において彼らは人間の問題にする (Ibid. S. 54)。しかも「彼らの批判的態度及び彼らの科學的研究の衝動における情熱性は同時に彼らの事象性であつた」 (Ibid. S. 58) と指摘する。しかしレイヴィットが指摘する兩者における共通性は、我々が指摘せんとする共通性、即ち彼らは事象に即して、しかも窮極において實踐を問題としたといふことと異なる。

レイヴィットはマルクスとウェーバーの諸論文に即して、問題を展開するが、彼はその諸論文を通じて看取さるべき、彼らの現實究明の態度に經驗的方法を理解しない。彼は資本主義における哲學的問題を指摘し、問題が哲學的であるが故に「『資本主義』は……社會哲學的な追究の對象にされる」 (Ibid. S. 54) とする。かく哲學的問題を哲學的に説明せんとする彼の態度は形而上學的方法である。従つて資本主義の問題は窮極において人間の問題であるといふことから生ずる哲學的問題を彼は實踐的なそれではなく思惟的なそれと解する。従つて「市民的社會學とプロレタリア的マルクス主義」 (Ibid. 53) の對立として解されるウェーバーとマルクスとの相異を明らかにするた

めに、「人間についての彼らの理念における相異を明らかにすることを目的とする」 (Ibid. 55) レイヴィットは彼らの理論の妥當性を思惟的に檢證せんとする。しかるに彼らは共に經驗的方法に立脚するが故に、その理論の妥當性を實踐的檢證にゆだねんとする。従つて彼らによるウェーバーとマルクスとの對比においては、彼らの相異はその固有なる姿では明らかにされない。

かくてまたレイヴィットは彼らの經驗的方法を徹底することではなく、むしろそれを中斷し、彼のウェーバーとマルクスとの對比を可能ならしむる手掛りとして、經驗的方法自體のうち彼らの人間についての理念の相異がそれに基くところの價值觀點の相異を指摘する (Ibid. 58) 即ち「ウェーバーは普遍的な、不可避的な『合理化』の絶對に中立的、しかも評價によつては二義的な觀點の下に資本主義を分析する。これに對して、マルクスは普遍的な、しかも革命的な人間の『自己疎外』の二義的な價值を追放せる觀點の下に資本主義を分析する」 (Ibid. 59)。しかし我々は、合理化と自己疎外とは彼らの經驗的方法における外面的な相異にすぎず、根本的には同一なものであることを強調する。即ちウェーバーの合理化を手引とする資本制的社會の解釋は問題と對象との分離乃至實踐と認識との分離を前提とするが、かかる前提の下において體系的に認識されぬもの、非合理的なもの體系的認識に合理化であり、實現される

ことなき自己疎外である。また資本論における價值法則の自然法則的作用に着目すれば、自己疎外は事物的合理化となる。しかもウェーバーは認識の限界を越えることにより、マルクスは價值法則の自然法則的作用が實踐に擔はれることにより、彼らの研究方法が固有の意味において經驗的方法たることを表明する。しかしレイヴィットは經驗的方法がそこにおいて事實を把握するところの實踐を理解しない。

「ウェーバーの批判が前提とする唯物史觀はマルクス自身のことにおいては字義通りでは見出されないやうな事象」即ち「通俗マルクス主義の所産」 (Ibid. 207-8) である。この誤つた形において唯物史觀は形而上學となるが、これがマルクスにとつてあてはまらないのはウェーバーを單なる専門科學者とすることが適當でないのと同様である。従つてウェーバーの方法のマルクスのそれに對する異種性は「現實——科學の現實をも含めて——に對する彼の態度の全體と、その聯關からのみ看取さるべきである」 (Ibid. 211)。かかる現實に對する態度においてウェーバーは經驗的方法に立脚してゐた。先驗的觀念論は實踐的檢證への道を開いてゐるマルクス理論に對しては批判的であることを得ないと解する限りは、哲學的には先驗的觀念論と了解の上に立つウェーバーがマルクスを誤つた形においてのみしか批判しなかつたのはむしろ當然であり、更に彼は經驗的方法をとることにおいてマルクスに同調するものをもつてゐる

た。しかるにレイヴィットは「ウェーバーの批判の誤つた形においてマルクスに對するウェーバーの相異の獨特な動機が明らかにされる」 (Ibid. 208) とし、「この批判はそれが二義的なあらゆる種類の演繹を原則的に放棄し、その代りに『具體的』歴史的分析として歴史の現實のあらゆる要因の相互制約性を明らかにし、かつそれをもつて精神的及び唯物論的な歴史形而上學の『面性』の正に根柢をくつがへすといふことによつて『實證的』であらうとするといふ意味において唯物史觀の實證的批判たらんとする」 (Ibid. 210) と解する。しかもかく解された兩者の相異は、レイヴィットにとつて彼らの人間についての理念のそれに歸着するといふことにおいて、彼は兩者の對比を思惟的な問題としてなした。

人生に對する窮極の立場が多であるか、一であるかといふウェーバーとマルクスとにおける相異はレイヴィットによれば、所謂事實によつてではなく、神々の闘争において結着さるべき人間についての理念の相異である。しかも「かかる闘争は何によつても……廢絶され得ない」 (Ibid. 213) といふことにおいてレイヴィットはウェーバーがマルクスかの選擇を斷念するかのやうである。しかし「かかる理念は人間をこえた理念ではなく、人間についての理念である。かかるものとしてそれは人間に屬する」。それ故にかかる理念の眞なることは人間的に證明される。

ウェーバーとマルクスとの人間についての理念の相異において、いづれが正しいかを決定し得ないとすれば、人間の窮極の立場について二つの異つた見解が存在することになるから、人間が唯一の窮極の立場に立つもの即ち同類體であることは否定される (ibid., 214)。かかる結論においてレーヴィットは一般的なものと私利利害關係の統一といふヘーゲル的な意味における同類體 (ibid., S. 205) として人間を把握するマルクスを否定する。しかも人間が同類體であるか否かが、レーヴィットが指摘する兩者の人間についての理念の相異そのものであるから、レーヴィットは結論においてウェーバーを支持する。かく彼によつて支持されるウェーバーは眞のそれであるだらうか。

三

マルクスが人間を同類體としたことは、彼が經驗的方法の窮極において實踐を人間と自然との同一性において把握したからである。この點において、彼は模寫説をとる。しかしかかる模寫説は演繹的原理ではなく、事象に即して把握され、従つて實踐的檢證にさらされる。

ウェーバーの方法を特徴づける「理想型的概念形成の目的は一般に類的なものではなくて、逆に諸文化現象についての特質を鋭く意識させることである」(W. L., S. 202)。かかる類化されない個性的なものへの執着において、彼は模寫説と全く對立する。(W. L., S. 192)。ウェーバーが世界觀と階級利益と

の親近性を認め (W. L., S. 153) 且つ人間における機械的本能的なもの、決定的な重要性を認めながらも (W. L., S. 518) 即ちマルクスとの極大化された近似性にもかかわらず、而もマルクスと對立するといふ事態は、理想型と模寫説との對立において理解される。

しかもウェーバーの模寫説の排斥は「社會的行爲を諷刺的に理解する」(W. L., S. 508) ことを課題とする理解社會學において、「それが閉じ込められてゐるところの狭い範圍を意識して」(W. L., S. 518) なされた。かかる狭い範圍を脱しての現實の全體に對する態度においては、模寫説における統一を實踐の問題と解するならば、彼も經驗的方法における實踐の統一を否定しはしないだらう。

ウェーバーとマルクスとは共に事象に即して實踐を追究する。しかしマルクスにおいては研究對象はそれ自體事實であるが、ウェーバーにおいてはそれは思惟的形物 (W. L., S. 166) であり、従つて體系の統一、理念の實體化は慎重に拒否されてゐる (W. L., S. 192) から、マルクスにおいては實踐は體系の統一として、ウェーバーにおいてはそれは體系をこえるものとして把握される。この故にマルクスの經驗的方法は體系的に既成の事象性をこえてゐる。しかしウェーバーの經驗的方法は體系的には事象性を固守する。この點においてウェーバーにおいてマルクス以上の一層の哲學疎外の傾向を看取し得る。

編輯後記

歴史は發展の連続であると、ナポリの哲人ウイコは説いてゐる。何となれば、市民的世界は人間の創るところであり、そして人間の本性は到るところにおいて同一であつて、一撃を以て變じ得るものではないからであるといふ。更に彼は、論理的必然性が歴史の生成の必然性を創るといつてゐる。ここに彼の發展理論の裏付けがあり、深き思索の跡がある。

これ等によつてウイコがいहांとしたところは、民族の史的發展に普遍的法則を發見しようとするのであつた。然し、歴史の中に普遍的法則を見出さうとする企てに對しては、異議を挾まることが多いであらう。それだけに、彼の歴史哲學が民族心理學に近いといふ論證になる。

この普遍的法則といふ點を除いて、歴史は發展であるといふ時、かかる命題は目的論的契機を含むものとして難ぜられることもあらう。然し歴史は發展の連続なるが故に、ウイコ研究の第一人者たるクローチエの言葉、「すべての眞の歴史は現代の歴史である」が、再建され行く。ここに、歴史についての青い鳥を見出す人は多い。

ウイコはその著「新學問原理」の中でいふ、「事物が如何に成立してゐるかの仕方は、その事物の性質が如何なるものかを説明するものであり、かかる説明が學問の本來の課題である」と。味ふべき深さを持つた言葉である。

(高村象平)

<p>昭和二十三年三月二十五日印刷 昭和二十三年四月一日發行 第四十一卷 第四號</p> <p>本號定價 金二拾五圓 送料 一圓二十錢</p> <p>東京部港區芝三田豐國町八 高村象平 川口芳太郎 東京部港區芝三田豐國町八 圖書印刷株式會社</p>	<p>豫約購讀料 一年分 金三百五十圓(送料共) 半年分 金百七十五圓</p> <p>豫約購讀料は發賣所宛お拂込み下さい 誌代變更の場合は精算決濟致します 編輯に關する用件は發行所へ 營業に關する用件、購讀申込は發賣所へ願ひます</p> <p>發行所 東京部港區芝三田三丁目慶應義塾大學經濟學部研究室内 慶應義塾經濟學會 日本出版協會會員B-1101-16 東京部港區芝三田二ノ一 慶應出版社 日本出版協會會員A-1101-19</p> <p>發賣所 東京部千代田區 神田區錦町三ノ九 日本出版配給株式會社</p>
--	---